

## 出張報告書

出張者: 中澤 港(保健学研究科国際保健学領域 教授)

訪問先: マヒドン大学公衆衛生学部

訪問期間: 2013年2月17日~2月23日

訪問の目的: 既に65年にわたる歴史をもち、Internationalコースを卒業しMPHをもつ同窓生の数だけで1000人を超えるという、名実ともにアジアでNo.1の公衆衛生学部を訪問し、MPHコースの運用方法について(とくに英語で教育する、海外からの学生受け入れについて)学ぶとともに、研究交流や教育交流の可能性について協議すること。

日程:

2月17日~18日: 関西国際空港発, バンコク着

18日(月): マヒドン大学熱帯医学部のゲストハウスで休憩。午後は学部長から公衆衛生学部の概要説明を受け、大学院教育担当のDeputy DeanであるDr. Kwanjaiから大学院教育についての説明を受け、国際渉外担当のDeputy DeanであるDr. SuphaphatとMOAやMOUの内容について意見交換。

19日(火): 午前中は日本の公衆衛生教育と研究の状況についてプレゼンし意見交換。午後は学部・大学院合同の教務連絡会議で挨拶後、International Studentのサポートスタッフからヒアリング。

20日(水): 午前中は微生物学教室を訪問し、教室代表から微生物学教室についての概要説明を受けた後、Dr. Charnchudhiから詳しい話を伺い、施設見学。午後は公衆衛生学部の大学院生と教員を対象にした盗作対策ワークショップを見学してから、この1年間在籍し修了間近な大学院生からヒアリング。

21日(木): 午前中はMPH運営委員会の先生方と意見交換。午後はSalaya Campusの施設見学。

22日(金): 午後にまとめディスカッション、MOAやMOUを含めて今後の協力の方向性について協議。

23日(土): バンコク発関西国際空港着

出張報告:

(1) マヒドン大学公衆衛生学部の概要について

マヒドン大学公衆衛生学部(Faculty of Public Health, Mahidol University)は、マヒドン大学創立当初から存在し65年の歴史をもつ。学士、修士、博士合わせて、毎年1,400人の卒業生を輩出している。

バンコク市内Victory Monumentに近いキャンパスを、後に設置された熱帯医学部(Faculty of Tropical Medicine)、歯学部(Faculty of Dentistry)と共有している。公衆衛生学部としては、7つの建物を持ち、13の研究室(Department)、オフィス、講義室、学生のリフレッシュスペースなどが存在している。公衆衛生学部7号館の6階と7階の図書館は3学部共有である。寄宿舎やゲストハウスは建築中の新しい建物に設置予定だが、現在のところ存在しないため、Visiting Scholarの滞在はホテルか、敷地内にある熱帯医学部のゲストハウスを利用している。学生は安価なアパートの斡旋を受けることができる。

4年制でBachelor of Public Healthを授ける学部教育も行っており、専門科目としては看護学や栄養学、保健管理などが存在する。学部教育は1年生と2年生はSalayaキャンパスという別の場所で受ける。大学院教育は2系統あり、専門職としてのMPHとDr.PHを授けるコースと、研究職としてのMScとPhDを授けるコースが存在する。MPHとDr.PHには英語教育とタイ語での教育が両方存在するが、MScコースでは、英語で修得できる専門領域は、生物統計学教室(Department of Biostatistics)が実施しているHealth Informaticsだけである。しかしPhDはすべての専門領域でInternational programが存在する。

(2) 大学院教育におけるInternational programについて

MPHコースは、13ヶ月である。日本人を含む1000人以上の学生がMPHのInternational programを修了している。MPHのInternational programの目的は、健康な世界に向けて人びとの健康とQOLを改善するために必要なスキルを保健医療の専門職者に与えることである、としている。MPHコースに応募するには、MD、MBBS、BPharm、DDS、DVM、BN、BScのどれかをマヒドン大学が認めた教育機関から取得済みでなくてはならない(BHlthSciは、おそらくBNやBScに準ずるものとして認められる)。また、最低2年間、公衆衛生かその関連領域での実務経験(インターンでは不可)を要する。少なくともTOEFLが480点以上(資料によっては500点と書かれているものもある)、またはそれと同等の英語能力試験成績も必要である。応募者は12

月までにこれらを含む必要書類を揃えて **Admission Office** に応募する。書類選考を経て入学が決まると、3月から5月初めまでは、夏学期が始まる前の **pre-requisite** コースを受け、本コースを受けるのに必要な前提知識を身につける必要がある。5月から1学期が始まり、9月から2学期が始まる。1月から4月までのサマーセッションで MPH コースが修了する。MPH コースには 8 つの専門分野 (Urban health, Primary Health Care, Dental Public Health, Health Promotion, Public Health Technology, Human Health Development, Community Health Services Development, Reproductive Health) がある。



MSc については、他の大学院と同じく 2 年間のコースとなる。修士論文の提出が必須である。現在のところ専門分野として **Medical Informatics** しか **International program** を提供していないが、将来は **Microbiology** などの分野でも **International program** を提供する予定とのこと。

博士課程については、Ph.D.でもDr.PHでも3年以上かかるのが普通だが、どちらも英語だけで修了可能とのこと。Dr.PHにはMPH取得後でもB.PH取得後でも入学可能だが、必要単位数が異なり、後者の場合は87-96単位を要し、7~8年かかるのに対し、前者の場合54単位で済み、3~5年で卒業可能である。Dr.PHプログラムの専門研究領域は、公衆衛生栄養(Public Health Nutrition)、疫学(Epidemiology)、公衆衛生管理(Public Health Administration)、健康教育と行動科学(Health Education and Behavioral Sciences)、公衆衛生看護(Public Health Nursing)、寄生虫学(Parasitology)の6つがある。紀要を国際学術誌として出版しており、学位論文は国際学術誌に掲載される必要があるため、その受け皿としても機能している。

一方、学部として、何種類もの **International short course training** (1~2 週間) を実施しており、ここから学生交流を始めるのも有望と思われた。**International short course training** の例は下表の通りである。

タイトル	概要
Primary Health Care	変化しつつある状況におけるプライマリケアの主な特徴についてと、それらがヘルスケアシステムにどのような意味をもっているかについての知識を強化し、健康開発プログラムへのコミュニティの参加を促すことをカバーする戦略をもカバーする。
Reproductive Health	ライフサイクルアプローチを利用するリプロダクティブ・ヘルスの概念とその重要性に焦点を当てる。生殖器感染症のスコープと重要性についての検討も含む。HIV/AIDSとその健康への社会文化的影響、思春期の性という視点からの思春期のリプロダクティブ・ヘルス、性的関係と結婚についても扱う。
HIV/AIDS prevention training	HIV/AIDSの予防と制圧に向けたアプローチに関心をもつ参加者のためにデザインされている。講義と最前線にいる数多くの施設訪問により、HIV/AIDSに特異的な問題について分野横断的な視野が提供される。
Hospital Management	病院管理コースは、参加者を、公衆衛生に適用可能なリーダーシップと管理の問題に曝露させる。講義とワークショップにより、参加者はAICの概念と方法に習熟する。病院管理の創意原則、問題分析、知識管理、最善の実践と、それらの病院管理と改善への応用、病院経理、PHC管理、病院再構成と認証を学ぶ。
Communicable Disease	地域、国家、国際レベルでの感染症とその公衆衛生的な影響に焦点を当てる。感染症疫学、とくに人畜共通感染症、HIV/AIDS、臨床アプローチ、サーベイランス訓練、感染症制圧専門家の役割を学ぶ。
Non-communicable Disease	心血管疾患、糖尿病、その他の公衆衛生に重要な非感染症を、有病割合、影響、リスク因子、予防と制圧について概観し、フィールド訪問と討論により、これらの疾患の発生と管理、公衆衛生への影響についてのより深い理解が得られる。予防戦略、活動、政策開発についても学ぶ。
Health Promotion	コミュニティーベース及び集団ベースの健康増進と疾病予防の基礎を構成する基本概念、戦略と方法を紹介する。健康増進を公衆衛生の文脈に位置づけ、健康を改善しwell-beingを増進するためにデザインされた政策形成、計画、実装と評価に加え、健康増進戦略と実践活動について幅広く概観する。
Health Promotion in the Elderly	ライフスタイル、文化、環境を含む、老化に寄与する因子と、それらが健康を維持し幸福を増進するという側面とどのように関連しているのかに焦点を当てる。生活機能とその質の発達と改善をサポートする戦略について検討する。包括的アプローチをとり、栄養、運動、活動、健康危機予防、自己責任維持、ストレス管理といった因子を学ぶ。発達、感情及びスピリチュアルな必要性についても検討する。

### (3) 学生の受け入れ体制について

入試は上述の通り、AO入試である。MPHコースには45人～55人が入学する。2012年度は日本人は2人(2人とも医師)だったが、2013年度は6人(うち2人は医師、3人は看護師、1人はNGOで水のプロジェクトに従事していた衛生工学の専門家)の予定である。学費は年間約7,500 USドル(来年度は約8,000 USドルに値上がりすること)で、これは世界で最も安いMPHコースということだった。

現在のところ、公衆衛生学部は寄宿舎やゲストハウスを保有していない。Faculty exchangeの場合、早期に予約すれば熱帯医学部のゲストハウスを利用することが可能である(1泊当たり約3,000円程度で、シャワー、トイレ、エアコン、冷蔵庫が備えられた、かなり広い部屋に泊まることできる)。ゲストハウスを備えた公衆衛生学部の新しい建物を建築中であり、2013年中には利用可能になる予定である。学生は月4,500バーツから5,000バーツ(日本円で約15,000円から17,000円程度)のアパートを大学から徒歩15分くらいの範囲で斡旋して貰うことができる。大学院学生のサポート担当の事務官(7号館5階のMPHコースInternational program部門の扉を突くとすぐ右のスペースに常在)がいて、学生が気軽に相談する様子が見られた。学生への連絡は基本的に電子メールで行われるが、掲示スペースもあって併用されているようだった。



学生の福利厚生施設としては、MPHのInternational programの学生が休憩したり喋ったりするための休憩室(右上写真)があり、専門分野を超えた交流がもたれていた。

### (4) 大学院生へのヒアリング結果

入学後1年弱が経過し、あと2ヶ月で卒業を迎えるという2人の大学院生(1人はネパールから来た衛生工学の専門家、1人は日本人医師)に、マヒドン大学公衆衛生学部のMPHコースInternational programで直面した問題点について尋ねてみた。

最大の難点は、言語の壁とのことであつた。基本的に事務手続きも含め英語で済むのだが、それほど英語が得意でないスタッフもいるし、英語の発音に癖があるので最初は聞き取りにくいのである。また、タイ語コースの学生は、院生をリーダーとして様々な専門分野の学部生と、他大学の医学科の学生も混じり、僻地の村で、5週間の滞在研修を行うのだが、僻地の村では英語が通じないため、International programの学生はこれに加わることができない。

2番目の問題は、13ヶ月でMPHに必要な39単位を修得するため、学習スケジュールが非常にタイトになっているということであつた。中東から来ている学生の中には、統計学をまったく学んだことがない者もあり、疫学と生物統計学で苦勞する人が多いとのことであつた。グループワークが多く、各班で文化的背景が異なる学生がそれぞれ勝手なことをいうので、とりまとめをする役になった学生が大変な思いをするけれども、それは途上国の公衆衛生の現場でもありうることだから、いい練習になっていると考えることもでき、功罪両面ある。International programの大学院生も1週間のフィールド研修を2回実施することになっており、MPHスタッフの目標は、実際に現場で起こっている公衆衛生上の問題を把握し、評価し、解決策を提案することができるレベルに到達することなので、そのためのシミュレーション的な授業も多く、大変だがやりがいがあるとのことであつた。

なお、日本の水準からすると物価は安く、タイの人々は親切だし、International programの大学院生もほとんどがアジアの人たち(たまにアフリカからも来るが欧米人はきわめて稀)なので馴染みやすいとのことであつた。

### (5) MPH運営委員会からの意見について

これまでに他学部と締結したMOUをひな形としてInternational affairsのDeputy Deanに意見を求めたところ、現在の形だとStudent exchangeが1年単位としか読めないのが、英文を変えた方がよいという意見と、交換留学生の宿泊施設を"provide"すると書かれているのは、アレンジするだけでいいのか、経費負担も含むのかわからないので、それが明確になる英文にすべきという意見を得た。

運営委員からの意見は、交換により参加することができる講義や演習の科目をリストアップすべきという点と、

Double degree は国の認証もいるので先の目標として、できるところから交流を始めて実績を作るべきで、例えば Informal な student workshop などからでもいいのではないかと、小さなものでいいから、神戸大学とマヒドン大学の間で遠隔講義システムを作ったらいいのではないかと、さらに、公衆衛生教育と学位についての認証をどうするのか (APACPH の認証は受けているが、米国の CePH の認証はなかなか通らないらしい。それらとは別に国——日本の場合は文部科学省——からの認証も必要) という点が主なポイントであった。



また、既に Double degree program を始めている例を教えて欲しいと求められたので、

GSICS が中国 Fudan University と韓国 Korea University と昨年からは開始した Campus Asia プログラムの例を紹介したが、文系だから成り立つので、資格認定が必要な MPH では難しいのではという意見があった。

#### (6) 共同研究の可能性について

微生物学教室の施設見学をした。P2 施設は建設予定。PCR の機械はたくさんある (右上写真)。遺伝子組み換えをやっているラボもある。外部から細菌やウイルスの検査を受注することや、作成した培地を売ることによって研究室運営経費の足しにしているとのことであった。長崎大学で論博を取得した Assoc. Prof. Dr. Charnchudhi は、ウイルス、リケッチア、細菌を対象に One health というコンセプトで人獣共通感染症を研究していて、デング熱やインフルエンザについて精力的に研究をしており、共同研究にもとても乗り気だったし、1 週間のスタディツアーの受け入れも可能とのことであった。

#### (7) MOA, MOU について

マヒドン大学としては、MOA や MOU なしでも Student exchange や Faculty exchange や研究室レベルの共同研究は可能だが、単位互換 (credit transfer) や Double degree (dual degree ともいう) の program を作るには、シラバスやカリキュラム検討のワーキンググループを相互に設け、学生がどの期間にどの科目をとれば何単位になるのかを互いに認証した上で、そこまで含んだ詳細な MOU を締結する必要があるとのこと。後半は尤もだが、当方としては、神戸大学の講義枠あるいは演習枠の読み替えとして、研修あるいは修論の研究の一部をさせていただき、1 週間、1 ヶ月、3 ヶ月、または 6 ヶ月の student exchange をまずは始めたいと要望した。

報告日:

2013 年 2 月 26 日 (火)